

1. 個別的で一回的な主観的自己や「今、ここ」の現実存在に着目し、ヘーゲル哲学やマルクス哲学のような普遍的・客観的真理よりも、主体的真理を重視する哲学。機械文明や世界戦争など、現代人の不安が背景。 1
2. 「私にとって真理であるような真理を発見し、私があるために生き、そのために死にたいと思うようなイデー（理念）を発見する」とキルケゴールが書いた実存的な真理。 2
3. 「今、ここ」を生きる現実的・具体的な個別者としての在り方。語源：ラテン語の *existentia* 「現存」（*essentia* 「本質」と対） 3
4. **PERSON** 19世紀、デンマークの思想家。実存主義の先駆者で実存の三段階を説き、キリスト教信仰を重視。有神論的実存主義を主張。 4
5. **BOOK** キルケゴールの著書。神との関わりを避け、絶望という病を患って真の自己を喪失した現代人の心理を考察。実存を「自己自身と関わる精神」と定義し、常に自己自身と向き合う主体的な自己の在り方を主張。 5
6. キルケゴールの実存の三段階。「あれも、これも」と刹那的肉体的快楽の追求に生きる享乐的段階。倦怠感や虚無感にとらわれ絶望。 6
7. キルケゴールの実存の三段階。「あれか、これか」と良心に従い道徳的に生きる段階。無力感や原罪（自己愛などから神の意志に背くこと。人間が肉体をもつ存在であることに由来する弱さ。英語の *sin*）感から絶望。 7
8. キルケゴールの実存の三段階。「死に至る病」である絶望にとらわれた人間が、神の前の単独者として信仰を選ぶという実存の最終段階。 8
9. キルケゴールの説く、真の実存の在り方。自己の存在の根拠である永遠の神の前にただ一人立ち、それに向き合って生きる人間。 9
10. **PERSON** 19・20世紀、ドイツの有神論的実存主義哲学者。死・苦・争い・罪責などの限界状況にぶつかって挫折することで自己の有限性を自覚し、包括者＝超越者としての神を感得すると説いた。 10
11. ヤスパーズの説く有神論的実存主義哲学で、包括者＝超越者としての神を感得するために自己の有限性を自覚する契機となる「人生の壁」。 11
12. ヤスパーズの説く、真の自己の確立を目指すもの同士の「愛しながらの闘い」。お互いの自己探究を吟味しあうこと。 12
13. **PERSON** 19世紀、ドイツの無神論的実存主義哲学者。キルケゴールとともに実存主義哲学の先駆者となる。ニヒリズム哲学を展開して、「神は死んだ」と説き、権力への意志に基づく「超人」を唱えた。 13
14. **BOOK** ニーチェの著書。ゾロアスター教の開祖が語るという形式で、キリスト教的価値を否定し、それにかわる「超人」の思想を説いた。 14
15. ニーチェの説く、主人（英雄）道徳としての権力への意志に生きて、「善悪の彼岸」にある新しい価値を創造しようとする人間の在り方。 15
16. ニーチェが、キリスト教のそれは「価値なきものを価値とした」ので受動的として否定し、自分の主張する「虚無を徹底してそれを克服」するそれは能動的として肯定したもの。 16
17. ニーチェの説く超人思想で、「より強大ならんとする生命力」を意味する主人（英雄）道徳。 17
18. ニーチェの説く、無意味・無目的な繰り返しの永劫回帰である人生（神なき人生）の現実を、「人間的」として積極的に引き受ける生き方。 18

T. Q. 「キルケゴールとニーチェそれぞれの実存主義の違いとは？」

T. A.

キルケゴールは実存の三段階を美的実存、倫理実存、宗教実存とし、単独者として信仰を選ぶ宗教実存を重視する有神論的実存主義であった。ニーチェはキリスト教道徳を受動的ニヒリズムとして否定し、「神は死んだ」と唱え、能動的ニヒリズムで新たな価値を創造する超人であるべきであると主張する無神論的実存主義の立場をとった。